

# イスラエルによるカナン侵攻物語をどう読むか ——カナン人虐殺を命じたのは誰か?——<sup>1</sup>

佐藤 潤

## 1. はじめに

旧約聖書における「戦争」には、単純な歴史記述ではなく、明らかに好戦的で、憐れみの気持ちのかけらもないようなものも多いのである。利益獲得のために争う「戦争」というよりは、狂気に満ちた「虐殺」のようなものも少なくはない。敵の兵士のみならず、その町に住む女、子供、家畜まで、あらゆる命を奪い、街を焼き払い、文字通りの殲滅を命じ、相手に対して憐れみの気持ちを保つことさえ禁じている箇所も見られる。<sup>2</sup>

これは宗教学者、石川明人による旧約聖書の観察である。おそらく、旧約聖書の読者の多くが、同様の観察をするであろう。例えば、旧約聖書には次のような記述がある。

モーセは、軍勢の指揮官たち、すなわち戦いの任務から戻って来た千人の長や百人の長たちに対して激怒した。モーセは彼ら

<sup>1</sup> 本稿は、戦争や軍事力保有と旧約聖書に関して、筆者が行ってきた複数の講演や講義の内容を増補したものである。それぞれの講演や講義において、貴重なご意見やご批評をくださった全ての方々に感謝の意を表する。

<sup>2</sup> 石川明人『キリスト教と戦争:「愛と平和」を説きつつ戦う論理』(中央新書、2016年) 77頁。

に言った。「女たちをみな生かしておいたのか。よく聞け。この女たちが、バラムの事件の折に、ペオルの事件に関連してイスラエルの子らをそそのかし、主を冒瀆させたのだ。それで主の罰が主の会衆の上に下ったのだ。今、子どもたちのうちの男子をみな殺せ。男と寝て男を知っている女もみな殺せ。男と寝ることを知らない若い娘たちはみな、あなたがたのために生かしておけ。」<sup>3</sup>

ここには、一方で「殺してはならない」という十戒を民に伝えたモーセが、敵国モアブとの戦闘において、敵を殲滅しなかった自軍の代表たちを叱責し、子どもに至るまでの虐殺を命じ、少女に関しては強姦を示唆するような処置を命じている。この背後には、「イスラエルの神ヤハウエに従わない民ならば殺してもよい」という論理があることは否定できないだろう。さらに、旧約聖書では、このような殺戮行為が神によって命じられたと証言されることもある。

ヨシュアはその全地、すなわち、山地、ネゲブ、シェフェラ、傾斜地、そのすべての王たちを討ち、一人も残さなかつた。息のある者はみな聖絶した。イスラエルの神、主が命じられたとおりであった。<sup>4</sup>

こうした旧約聖書の記述に、今日の聖書読者は困惑させられてしまう。イギリスの生物学者リチャード・ドーキンスは、その著書 *The God Delusion* (邦題:『神は妄想である——宗教との決別』) の中で、「(イスラエルによるカナン人虐殺は) 民族浄化であり、……ヒトラーのポーランド侵攻やサダメ・フセインのクルド人虐殺と倫理的に全く同じことである」とさえ評している。<sup>5</sup> はたして、旧約聖書における暴力や戦争に関する記事をどのように解釈すればよいのだろう

<sup>3</sup> 民数記 31:14-18。本稿における聖書引用は、新改訳聖書 2017 に依拠する。

<sup>4</sup> ヨシュア記 10:40

<sup>5</sup> Richard Dawkins, *The God Delusion* (Boston: Mariner Books, 2006), 247.

うか。<sup>6</sup>

この問題については、すでに多くの議論がなされており、伝統的な神学的応答がいくつか存在する。たとえば、「カナン侵攻は、神が命じたものであるから、たとえ人には理解できなくても、常に正しい」、「カナン人の悪を罰するという高貴で良い目的があり、暴力を称えているわけではない」、「終末における神の裁きを予表している」といった応答が考えられる。<sup>7</sup>これらの伝統的な応答については、すでにウィリアム・J・ウェップとゴードン・K・オエステが、その問題点を詳細に議論している通り、不十分である。<sup>8</sup>いやむしろ、これら

<sup>6</sup>とりわけ、この問いは、近年勃発したウクライナ戦争（2022年～）とパレスチナ紛争（2023年～）という二つの戦争・紛争の只中にある世界に生きる者にとって、改めて問いかねるべきものである。ウクライナ戦争においては、ロシア正教会が正式に戦争を支持しており、またパレスチナ紛争においても、イスラエルによるガザ侵攻を支持するユダヤ教徒やキリスト教徒が世界中に多く存在する。旧約聖書（あるいはヘブライ語聖書）を正典とみなす宗教が現代の戦争を支持しているわけであるから、先ほど引用した民数記31章のような記述についても、「過去の出来事にすぎない」と一蹴することはできない。まさに21世紀においても、旧約聖書に描かれていることと同じことが起きているという事実から目を背けてはいけない。

<sup>7</sup>たとえば、こうした神学的立場の下、近年刊行された文献の一つにポール・コパンの研究がある：Paul Copan, *Is God a Moral Monster? Making Sense of the Old Testament* (Grand Rapids, MI: Baker Books, 2011)。コパンは、昨今の聖書学的成果を取り入れた議論を展開しているが、基本的な論点は、イスラエルのカナン侵攻はカナン人の倫理的堕落に起因するものであり、一方的な大量虐殺や民族浄化にはあたらないという伝統的な見解の範疇にある。また、ウィリアム・フォードは、カナン人の罪性と殲滅を「イスラエル人や聖書読者への警告」というイメージで理解することを提唱している：William Ford, “The Challenge of the Canaanites” *Tyndale Bulletin* 68 (2017):161-84。フォードの見解も、カナン人の倫理的堕落とカナン人虐殺の論理的繋がりや終末論における裁きという神学的命題を前提とするものであり、「悪を行う者を罰することは神の意思である」という伝統的な回答の一例である。

<sup>8</sup>本稿は彼らの議論を繰り返すことはしない。詳細は下記参照のこと。William J. Webb and Gordan K. Oeste, *Bloody, Brutal, and Barbaric? Wrestling with Troubling War Texts*, (Downers Grove, Illinois: IVP Academic, 2019), 33-51。また、ジョン・H・ウォルトンとJ・ハーベイ・ウォルトンも、聖書記者たちは、カナン人が倫理的に堕落した人々であることを論点としていることを指摘している：John H. Walton and J. Harvey Walton, *The Lost World of the Israelite Conquest: Covenant, Retribution,*

の応答は、結局のところ、今日における戦争を肯定することに帰結、あるいは利用されていると結論せざるを得ない。したがって、戦争なき平和な世界を目指すのであれば、別の考え方を模索する必要がある。

本稿は、すでに幾度となく聖書学者や宗教学者によって議論されてきたこの難解な問い合わせについて、改めて聖書学的な論考を試みる。特に、イスラエルによるカナン侵攻物語に焦点を当てて、考古学、オリエント学、聖書論の観点から、さまざまな可能性を包括的に探っていき、最後に、それらの議論を整理した上で、神学的提言を行う。<sup>9</sup>

## 2. 考古学的観点

まず、聖書テクストを検証する前に、考古学的観点から、イスラエルによるカナン侵攻の形跡を確認する。方法論として、聖書テクスト外から事実の確認を試みることは重要である。昨今の戦争において、戦争に直接参与する国や民族が主張する情報には、多分に誤情報や誇張、プロパガンダが含まれていることが、周知の事実となった。<sup>10</sup> 旧約聖書テクストも同様に信用に値しないと

---

*and the Fate of Canaanites* (Downers Grove, IL: IVP Academic, 2017), 31-72.

<sup>9</sup> この問い合わせを議論するにあたり、キリスト教徒の間でしばしば用いられる「聖書的」という言葉の用法について留意されたい。本稿は、基本的に「聖書的」という言葉の使用を避ける。なぜならば、ほとんどの場合において、「聖書的」という言葉は「(その言葉の使用者が信じるところの) 正しい聖書の理解の仕方、あるいは神学」を意味しているように思われるからである。誰かが「聖書的」見解を掲げた場合、その見解とは異なるあらゆる考え方とは、その人にとっては全て「非聖書的」となることは必然であり、正しい「聖書的」理解をめぐる論争が勃発することは避けられない。戦争と平和についての議論においても、自らの「聖書的」を脇に置かなければ、聖書の理解を巡って新たな争いが起こってしまうが、それでは本末転倒である。したがって、本稿において、筆者は決して「戦争についての聖書的な解答」を提示するつもりはないし、そのようなものが提示できるとも考えていない。本稿では、さまざまな考え方を紹介するが、それらが「正しさ」や「聖書的」見解を互いに主張し合うためではなく、共に考え、対話を深めるために用いられるならば幸いである。

<sup>10</sup> たとえば、ウクライナ戦争において、ロシア当局あるいはウクライナ当局が発表する「戦死者数」には大きな差異があり、客観的統計として利用することは不可

主張したいわけでは決してないが、やはり、ヨシュア記が戦争における勝者側の歴史記述であることは否定できない。とりわけ、戦争における残虐性という実際に起こったと考えられる事柄の是非や解釈を検討するのであるから、聖書テクスト外からの検証は、決して無駄にはならないであろう。ヨシュア記において、カナン征服が描かれるのは主に6—11章であり、エリコ、アイ、エルサレムを含む山間部、ハツォルなどの街が、ヨシュア率いるイスラエル人によって滅ぼされたとされている。それぞれの記述に関して、どのような考古学的発見がなされているか、下記に短く紹介する。<sup>11</sup>

まず、ヨシュアが最初に占領したとされるエリコに関しては、場所が同定されており、その地には数百年にわたる生活痕と破壊痕が複数確認されている。つまり、エリコは何度か建設され、しかし何度か破壊された形跡が残されている。そのうちの一つの破壊をヨシュア記6—8章の記述と照らし合わせる試みがなされているが、破壊時期や街の規模などにおいて、聖書記述と考古学的発見が一致しているということは困難である。続いて、ヨシュア記8章には、アイが破壊されたとあるが、この街についても、破壊された痕跡ある遺跡が見つかっている。しかし、年代の不一致ゆえに、アイについても、聖書記述を裏付けることは不可能である。一方、山間部の4つの街（エルサレム、ヤルムテ、ラキシ、エグロン）においては、前12—13世紀頃の破壊痕が見つかっており、これはヨシュア記10章の記述とおおむね一致している。ただし、ヘブロンに関しては、同時代に人が住んでいたという証拠は見つかっていない。また、ヨシュア記11章において破壊されたとされるハツォルに関しても、同時期に破壊痕が認められ、イスラエル民族によるものであった可能性が指摘されている。すなわち、ヨシュア記10—11章の記述は、考古学においてもある程度は立証することが可能である。

本稿は、考古学的見地から聖書記述の歴史性を評価することを目的として

---

能である。

<sup>11</sup> 次段落の記述は下記を参照した：Amihai Mazar, *Archaeology of the Land of the Bible: 10,000-586 B.C.E.* (Anchor Bible Reference Library ; New Haven and London: Yale University Press, 1992), 329-38、長谷川修一『聖書考古学』(中央新書、2013年) 110-114頁、杉本智俊『図説・旧約聖書の考古学』(講談社、2021年) 47-61頁。

いるわけではない。ただ、上記の議論を統合すると、考古学見地から少なくとも言い得ることは、下記の通りである。すなわち、イスラエル人によるカナン侵攻は、当時カナン地方全土で勃発していたというよりも、エルサレムを含む山間部の限られた地域においてのみなされていたということである。後述のように、この見解は、ヨシュア記の記述と必ずしも矛盾するものではない。

続いて、上記の聖書外の考古学的議論を踏まえた上で、改めて聖書テクストを分析する。ヨシュア記には、カナン征服において、イスラエルが多くの戦闘に勝利し続け、多くの領地を手に入れたことが記されている。ヨシュア記12-13章には、占領した地域と占領していない地域とがそれぞれ記載されているが、この記述によれば、ヨシュアが征服した地域は、非常に広大である。しかし、このヨシュア記の記述に対して、士師記は異なる情報を提供している。士師記1章は、ヨシュア記が占領したと主張する土地の大部分について、「カナン人を追い払わなかつた（19、21、28、30、32、33節など）」と証言するのである。すなわち、数多くの街が破壊されることなく存続し、カナン人がイスラエル領内に住み続け、イスラエル民族と共に存していたということを、旧約聖書自体が証言しているのである。実際のところ、戦争において破壊したとされる地域よりも、他民族と共に存していたとされる地域の方が圧倒的に広い。

この士師記1章の証言は、前述の考古学的発見と調和するものである。考古学においてはイスラエルのカナン侵攻と都市破壊は局所的であることが示唆されているが、士師記においても破壊された都市が実際は多くないことが証言されているのである。なお、この不一致をヨシュア記と士師記の矛盾と解釈する必要はない。ヨシュア記においては、ヨシュアの功績を後世に伝える目的で、彼の活動のうち代表的ないくつかの戦闘物語を詳細に記述している一方、士師記はカナン入植からイスラエル建国までの経緯を説明しようとしている。それゆえに、ヨシュア記で十分に説明されていなかったことを、冒頭に整理して提示していると考えられる。つまり、ヨシュア記と士師記が、それぞれ異なる動機や目的によって執筆されているゆえに、歴史記述にも差異が生じているのである。ヨシュア記と士師記の内容は、補完的であり、両書を照らし合わせるこ

とで、カナン侵攻の実像が浮かび上がってくるのである。<sup>12</sup>

以上の考古学的な分析から導き出される命題は、イスラエルのカナン侵攻は、少なくともドーキンスが非難するような民族浄化には当たらないということである。大規模な大虐殺が起こったというよりも、局所的にいくつか戦闘があったが、他民族との共存を選択したというのが聖書の証言に近い理解である。しかしながら、ヨシュア記の戦闘における問題は、その規模の大小にあるわけではない。問題とされているのは、戦闘に参加しなかった女性や子どもを含む人々に至るまで殺害し、強姦を許容していたという残虐性である。被害者の数が少なかったからといって、そのことが倫理的に許容されるわけではない。さらには、こうした虐殺を神が命じていたという証言こそが、より大きな問題なのである。続いて、こうした問題について、オリエント学の観点から検討する。

### 3. オリエント学的観点

オリエント（あるいは中近東）とは、エジプトから、メソポタミア（現在のイラク、シリア）、ペルシア（現代のイランやアフガニスタン）などを含む広大な地域を指し、オリエント学とは、その地域において発生した文明とそれに付随する言語、文献、歴史、社会、経済などのあらゆるものを探究対象とする学問分野である。イスラエルもオリエント世界の一部であり、古代イスラエルの諸様相を理解するためには、古代オリエント研究の成果は決して欠かすことができない。事実、旧約聖書は、古代イスラエルと周辺諸国との接触を幾度も記述しているし、イスラエル人のルーツをバビロニア出身のアブラハムやエジプト出身のモーセに見出すなど、古代オリエント世界から多大な影響を受け

<sup>12</sup> 他にも、五書やヨシュア記に度々出てくる「異邦人を追い払う」（出エジ 33:2、34:11、レビ 18:24-25、28、民数 21:32、申命 9:1、11:23、18:14、19:1、ヨシュア 24:8、11-12、18 など）という記述に着目し、戦闘に先立って、イスラエルが敵陣に警告を与え、非戦闘民が街から逃げる機会を与えていたということも指摘されている。詳細は下記参照のこと：Copan, *Is God a Moral Monster?*, 181-82、Webb and Oeste, *Bloody, Brutal, and Barbaric?*, 231-62。この解釈に基づくならば、イスラエルのカナン侵攻は、決して無防備の街を急襲し、無差別に住民を殺害したわけではないということになる。ただし、この点は考古学的に論証することはできない。

ていることを自ら証言している。そもそも旧約聖書の原語であるヘブライ語も、バビロニア語やエジプト語との関連がなければ、存在していないはずの言語である。古代イスラエルが周辺の世界から影響を受けているものは、当然言語だけではない。法律、歴史記述、詩文学、知恵文学など、旧約聖書に含まれておる様々な文学もまた、周辺諸国の文学との関わりの中で、発展してきたものである。さらに、その影響は、生活習慣、宗教儀式、建築方法、王制度を含む社会制度や政治など、ありとあらゆる範囲に及ぶ。

その中には、戦争の仕方や戦術などの戦争の流儀、あるいは戦争に関する文化というのも存在する。<sup>13</sup> たとえば、ヒッタイト、アッシリア、バビロニアなどのオリエント諸国は、戦争において、それぞれの神の名による軍隊の召集、神への誓願、犠牲を伴う祭儀、神託、「神が敵を王の手に渡した」という定式の宣言などを行っていた。戦争への勝利は、神の介入によってもたらされると考えられており、その感謝の証として、神への犠牲が捧げられていた。一例として、アッシリア王・タクルティーニヌルタ（前1244—1208年）の戦争記述を取り上げる。タクルティーニヌルタは、ある敵国との戦争にあたり、アッシリアの国家神アッシュルと先祖とが締結した契約を想起し、アッシュル神に戦闘への助力を懇願し、出陣の際には、この戦闘がアッシュル神の命にもとづくことを宣言している。また、アッシュル神の臨在の証として、軍旗や旗印を携帯し、また祭司も従軍し、軍事的助言を行い、戦闘は神々の許可、すなわち祭司や預言による神託が得られたときに行つた。戦闘に勝利したときには、その功績はアッシュル神に帰せられ、戦いから帰還した際には神々への犠牲を伴う祭儀を行い、感謝が表明された。

これらの特徴は、旧約聖書も見出されるものである。すなわち、ヨシュア記に見出されるさまざまな戦闘時の儀式や神託の宣言、記述における表現はイスラエル特有のものというよりは、古代オリエント文化の反映であると考えることができる。たとえば、「神が○○と言った」という神託はどうであろうか。

<sup>13</sup> 本段落の記述は下記を参照した：ピーター・C・クレイギ、『聖書と戦争：旧約聖書における戦争の問題』（すぐ書房、1990年）182-191頁、山吉智久「解説 古代イスラエルにおける「聖戦」思想をめぐる研究小史」『古代イスラエルにおける聖戦』（教文館、2006年）156-57頁。

ヨシュア記においては、戦争は神の命令によって開始され、人間が神に従うという構図によってなされている。たとえば下記のような記述は、多くの戦闘の場面でなされている。

主はヨシュアに言われた。「恐れてはならない。おののいてはならない。戦う民をすべて率い、立ってアイに攻め上れ。見よ、わたしはアイの王と、その民、その町、その地をあなたの手に与えた。あなたがエリコとその王にしたとおりに、アイとその王にもせよ。その分捕り物と家畜だけは、あなたがたの戦利品としてよい。あなたは町の裏手に伏兵を置け。」<sup>14</sup>

字義通りに解釈するならば、戦争の責任、戦術の立案と実行、敵住民の殺害の責任の所在は、命令を下した神にあるということになる。ヨシュア記において、人間は神の命令に従っているだけに過ぎない。しかし、聖書を字義通りに読むということは、解釈者側に起因する前提であって、聖書解釈の絶対条件ではない。聖書テクストは、当時の文化脈や物語のジャンルや特性を踏まえて、多角的に解釈されなければならない。古代オリエントの文化脈を考慮するならば、たとえば、ヤハウェの神託とは、神が実際にヨシュアに語ったということを証言しているのではなく、ヨシュアが神の名によって軍隊を招集し、祭司たちを通して神託を確認・宣言し、神の名の下に軍隊を鼓舞し、戦闘を行った、と解釈することも可能である。仮にそのような解釈に基づくならば、敵の虐殺を命じたのは神ではなく、神の名を用いたヨシュアや祭司たちである、という別の理解が生まれる。これは、今日に至るまで、数多くの戦争において実際に起きていることと同じ構図である。すなわち、人は古来より神の名を用いて、戦争を正当化してきたのであり、ヨシュア記もまた同様の歴史を証言しているのである。旧約聖書の記述をそのような観点で、再解釈することは可能であろうか。この点については、聖書論の問題が絡んでくるため、次節にて、別途議論を行うこととする。

---

<sup>14</sup> ヨシュア記 8:1-2

続いて、ヨシュア記と士師記の歴史記述における「敵を一人残さず、殺害した」といった証言について、古代オリエント文献との比較の中で再検討する。一例として、下記の三つの箇所を比べてみよう。

ヨシュアは全イスラエルとともにデビルに引き返し、これと戦い、それとその王、およびそのすべての町を攻め取り、剣の刃で彼らを討った。そして、そこにいたすべての者を聖絶し、一人も残さなかった。<sup>15</sup>

そして彼（カレブ）は、そこからデビルの住民のところに攻め上った。<sup>16</sup>

彼ら（ユダ）は、そこから進んでデビルの住民を攻めた。<sup>17</sup>

これらの箇所には、一度ヨシュアが全て息あるものを殺害し、一人も生存者を残さなかったとされる街デビルが、その後少なくとも二度、イスラエルによる攻撃を受けていることが描かれている。これらの記述は字義通りに解釈するならば、一見矛盾しているように見える。矛盾なく物語を理解するために考えられうる可能性は少なくとも二つある。一つは、一度完全に滅びた街デビルに、他の住民が移り住んできて、街を再建していたという可能性である。しかしながら、短期間に街の再建が可能であるのか、またなぜイスラエル人は街に住むことをしなかつただけでなく、敵による再建を見逃していたのか、という問題がある。実際のところ、これは、かなり無理のある説明である。

もう一つの可能性は、「そこにいたすべての者を聖絶し、一人も残さなかつた」といった表現は、一種の慣用表現であり、誇張が含まれているというものである。ウェップとオエステが詳述しているように、古代オリエント世界にお

---

<sup>15</sup> ヨシュア記 10:38-39

<sup>16</sup> ヨシュア記 15:15

<sup>17</sup> 士師記 1:11